釣れ釣れなるままに

２０１４年思い出の釣行記 PART.　１０

貴重な一本

鹿島釣狂

幌川河口でサケ一本

一年に一度だけと思っていた前回のサケ釣りが絶好調だったため、「あの素晴らしい釣りをもう一度」と十月二日（木）の平日にシフトを組み直して休暇を入れた。北山修作詞、加藤和彦作曲で「あの素晴らしい愛をもう一度」という曲があったけれど、命かけて誓うほどのこともないのだが、ステキな想い出を残してきたので、あの時と同じ釣りを夢見ての釣行だ。

前回の釣り人達の情報が伝わって、河口には釣り人が溢れているのではないかと、少し早い時間に起き出して午前三時には箸別に着いた。予想通り駐車帯には結構な車が停めてあり、前回はいなかったブッコミ釣り師も含めてウキルアーを用意した釣り人達が夜明けを待っていた。

私は、前回良かったウキフカセを暗い内から試してみようと思い、先着に先駆けて棒ウキにケミカルライト５０㎜を差し込んで振り込んだ。それを切っ掛けに、周りも負けじとウキルアーを飛ばし始めた。「今、やり始めると体が持たないから」と言っていたはずの同じ岩見沢から来たという隣の若者まで竿を振り始めてしまった。チカチカ光るウキライト（デンケミ５０㎜、７５㎜）に比べて、ケミ５０㎜でも自分のウキは目を凝らしてみないと見えない。それでも他人の仕掛に絡ませることもなく、おそらくサケが河口付近をもじっているだろうという思いで釣りを続けた。

しかしアタリは全然出ない。周りの人も誰も掛けない。明るくなった海面を見てもサケの姿は窺えない。結局、私が七時に道具を片付けた時まで、サケを釣り上げる人はいなかった。浜益の幌川河口に向かうことにした。

八年前にシャケ釣りに手を染めだした時、箸別が駄目で幌に移動してサケを二本釣り上げたことがあったからだ。この時は、河原の駐車帯で五百円の料金を払わなければならなかったが、今は自由に停めても良いようだった。

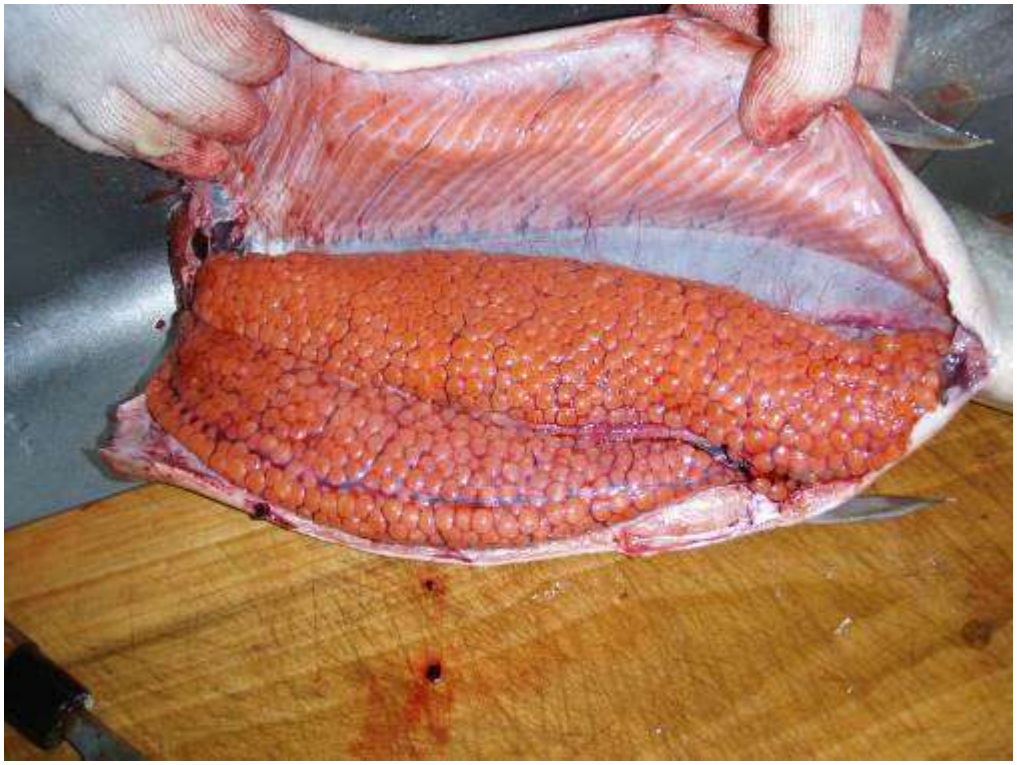
橋の上から川を覗いている地元の人がいた。一緒になって川を覗くと、淵にたまったサ

ケが瀬を勢いよく上っていく様子が窺えた。河口に行ってみると釣り人もまばらで、朝方から一本も釣れないので皆引き上げてしまったようだった。残っていた二人の釣り人は、跳ねもあったし、背びれが見えることもあったが、そのサケが食いつかないのだとウキルアーを飛ばしていた。私は、こういう時こそウキフカセではないのかと、時折現れるサケの背びれに向かって、振り込んだ。しかし、掛からない。波は二mほどのうねりを見せて押し寄せてくるようになった。そして私の他は誰も居なくなった。波の比較的死んでいる所に移動しながら一人で同じことを二時間ほど繰り返してようやく一本のサケを手にした。正真正銘の銀ピカの雌だった。

その時は数本のサケの背びれが見え隠れしている状態だったが、私のエサは底をつきそうになっていた。すると、どこから現れたものなのか、四人が近くに来てウキフカセで釣り始めた。左隣の二人にもかかった。右隣りの二人にも掛かった。その後現れたルアー単体を飛ばしていた人にも、スレで二本が掛かった。集まった人すべてがサケを釣り上げることが出来たのだ。

エサをすべて使い切った私が道具を片付けていると、「遠くからあなたが粘っている様子を見ていた。無理だろうと思っていたのだが、あなたがサケを釣り上げてしまった。サケのもじりも見え、サケが跳ねている姿もうかがえた。私たちはあなたの頑張りのおかげでサケを手にすることが出来た。もう少し頑張ってみます。」と嬉しそうに話してくれた。私の期待に応えてくれたのはたった一本のサケだったが、誰も釣り上げることができなかったサケを執念の粘りでものにしたことと、前回、女房から発せられた「今度は、サケのイクラだけを釣ってきてぇ〜〜〜。」の期待にも応えるメスだったことに満足してその場を後にした。

幌川河口で粘りに応えてくれた銀ピカのメスサケ



女房の期待にも沿う豊満なイクラを抱えていた

苫小牧西港でアナゴ一本

七月二十九日に我が会の愛する島強二氏が永眠されたのだが、四十九日の喪も明けたので、その彼の遺品分けをご家族様の意向で実施した。名手であった彼が工夫を凝らして作ったいくつかの仕掛けを私も頂戴したので、今後の釣り大会ではそれを使ってみようと思っている。

十月五日のその遺品分けの場で前野氏とアナゴを釣りに行ってみようという相談がまとまり、苫小牧西港南埠頭に向けて出発した。島氏の遺品にはアナゴ仕掛けがあり、それに触発されてしまったこともあるが、今期、二人ともまだアナゴの顔を拝めていないのだ。

西港では顔なじみになった地元の釣り師がやはりアナゴを狙って竿を出していたので、最近の状況を聞いてみたが、パッとしないようで釣り人も閑散としていた。南埠頭に停泊していた二艘の大型貨物船の間で竿を出した。今日は波風がほとんどなく、海もどんよりとしてアナゴ釣りには絶好のように思われた。左側で先着者が一人、サバを狙ってサビキ竿を出していたので、中央に前野氏、右に私が入る形になった。狭い場所なので、私はオマツリを避けて、船舶の裏側に向けて遠投に心掛けた。小さなアタリが出て、アナゴかもと慎重に合わせるとカンカイだった。その後はアタリも出なくて退屈な時を過ごした。

サバを狙っていた御仁に釣果がなく、二十号鉛でアナゴを狙いだした。やはり二十号では仕掛けが引き潮に乗って流れてきて前野氏の仕掛けと何度もオマツリしてしまった。彼は、今年からアナゴを狙うようになったという。その彼に５０㎝程のアナゴが来た。アナゴが全くいないわけでもないらしい。少し希望の光が差した。

前野氏が４５㎝程のアナゴを釣り上げた。しかし、その後もアタリは出ない。船舶の艫のライトが海面を照らしていたのでニシンでも寄っていないだろうかと様子を見に行った。釣りものの無い時の備えに、二人ともサビキ仕掛けを用意しているのだ。しかし、岸壁の縁に漂っているガヤの姿が垣間見えるだけだった。

自陣に戻ると一本の竿に糸ふけが出ていた。微妙な竿の移動をも分かるようにと竿先を５㎝ほどの間隔で二本並べていたのが、少しずれていたのだ。一本の竿が真っ直ぐになり、やはり大きく糸ふけが出ている。糸ふけをとっていると竿先をグイッ、グイッと引き込んだので大きく合わせてリールを巻いた。例のごとく、ググググッと刺さりこんだりフワ―と軽くなったりのアナゴと分かる独特な引き込みだ。この感触がたまらないのだ。ほかにこのような引き込みをする魚はいるのだろうか。一年ぶりの感触で引き上げたアナゴは例のごとく仕掛けをグチャグチャにしてサンマのエサに食いついていた。メジャーを合わせると６１㎝の大物だった。しかし、せっかくのアタリを見逃してしまったのが悔やまれる。いや、アタリを見逃したから掛かったのかもしれない。どうも自分は早合わせする傾向にあるのだ。

まあ、それはいいことにしよう。二人してそれぞれ一本のアナゴを手にしたことに満足して、午後十時には苫小牧港を後にした。

初アナゴにご満悦の筆者